19世紀末～20世紀中葉のカナダにおける優生学の展開と医療専門職（Ⅱ）

細　川　道　久

目　次

1.　はじめに
2.　19世紀末から20世紀初頭まで
　　――――チャールズ・K・クラークの移民政策批判
　　〔以上、『人文学科論集』（鹿児島大学法文学部）70号、2009年 7 月、に掲載〕
3.　第 1 次大戦から戦後まで
　　3. 1　精神薄弱者への関心
　　3. 2　カナダ精神衛生全国会議の設立
4.　1920年代から1930年代まで
　　4. 1　断種への関心
　　――――クラーク死去後の展開〔以上、本号〕
　　4. 2　カナダ優生学協会の台頭
　　――――オンタリオ州での断種法論議
　　4. 3　オンタリオ州での断種法不支持の要因
　　4. 4　カトリックと断種法
5.　おわりに

３．第１次大戦から戦後まで

３．１　精神薄弱者への関心

1916年、クラークは、再び移民政策を批判し始めた。彼が何ゆえに沈黙を破ったのか。それには、第１次大戦の勃発で移民の流入は緩やかになったものの、戦争による死傷が優秀な人材やその子孫の再生産を鈍化させるのではないか、あるいは、戦後にヨーロッパから不適当な移民がおしよせるのではないかという危惧が働いていた。また、ドゥビギンによれば、1914年にトロント総合病院で精神科が開設された頃から、クラークが精神薄弱者へと関心を向けるようになったことが主要因だとする[1]。かくしてクラークは、第１次大戦で移民の波が途絶え、戦後になって移民流入が再び活発化する前に移民政策に何らかの手を打つ必要があると主張し始めたのであった。

かつてクラークが勤務していたキングストンやトロントの救護院では重度の精神病患者に接していたが、トロント総合病院の社会福祉診療科には、それよりも軽度の精神薄弱者（軽愚、あるいは魯鈍）について、トロントの学校、少年裁判所、公衆衛生局 Public Health Department、その他社会福祉関連機関から診察の照会が寄せられていた。クラークは、こうした軽度の疾病は、精神医学や心理学の分析に通じた者でないと容易に発見できないゆえに、罹患者が街を徘徊しがちであり、彼らが犯罪者、売春婦、非行少年、依存的シングルマザーになりかねないとした。

クラークは、売春婦の６割が精神薄弱であるとし、精神薄弱を売春の根源とみなした。かかる見解は、後述するヘレン・マクマーチィ Helen MacMurchy（1862-1940）らに共有された。精神薄弱者は、売春婦となり、性病をまき散らし、次世代にも精神薄弱者が生まれることになる。精神薄弱者はまた、精神薄弱者を配偶者とするケースが多く、やはり欠陥のある人種が永遠に続くとされたのである。精神薄弱者にはまた、犯罪性が宿っているともされた。こうして、精神薄弱者は、反社会的存在とみなされ、彼らが生み

[1] *Keeping America Sane*, pp. 160-161.

出す悪循環を断つべく、精神薄弱者の再生産を阻止すべきだとの主張が唱えられたのであった[2]。このように、軽度の精神薄弱は、「正常な」市民と接する機会が多いがゆえに、隔離された重度の患者とは異なる意味で危険視されたのである。いってみれば、「正常」と「非正常」の境界をさまよう危険な存在として憂慮されたのである。

かかる問題に関して、当時、公衆衛生にたずさわる官吏らが、学校に目を向けたのは当然であった。オンタリオ州で、就学する児童・生徒の精神衛生の監督を率先したのは、マクマーチィであった。女子医学専門学校 Women's Medical College に学び、1901年トロント大学にて医学博士号を授与された彼女は、女性で初めてジョンズ・ホプキンズ大学大学院にて医学を学ぶことを許された。また、トロント総合病院の産婦人科の女性初のレジデントとなったほか、トロント大学の講師も務めた。1914年、彼女は、オンタリオ州教育省の精神薄弱者の監察官に任命され、翌年には同州教育省の特殊教育学級視学官となった。さらに、連邦政府に保健省が設置されると、1920年から1934年まで同省に勤務した。彼女は、社会悪は、食餌、栄養、衛生、出産、清潔さに対する母親の無知によるものだとし、健全な人種の育成の必要性を説いていた。彼女はまた、入院患者に限って、強制的ではない、つまり任意の断種を支持した[3]。

クラークは、マクマーチィを支援していった。彼女は、1912年にオンタリオ州精神薄弱者治療協会 Provincial Association for the Care of the Feebleminded (PACFM) を設立したが、後にクラークはこの会長となっている。この組織は、後に述べるカナダ精神衛生全国会議の設立につながることになる。

3．2　カナダ精神衛生全国会議の設立

1918年、オンタリオ州における精神衛生改革を求める人びとが集い、カナダ精神衛生全国会議が設立され、クラークは医事部長 medical director に就任

2　*Our Own Master Race*, pp. 41, 73; *Keeping America Sane*, pp.160-161.

3　*Keeping America Sane*, pp. 162-165.　バース・コントロール birth control は、不自然だとして支持しなかった。*Keeping America Sane*, p. 164.

した[4]。クラークの強力な指導の下、カナダ精神衛生全国会議は移民問題を最大の課題とした。もっとも同会議は、精神薄弱の問題をも扱っていたが、クラークが死去するまでは、移民の医務検査が中心課題であり、彼の死後、断種に関心が向けられていった[5]。そして、クラークに代わって、カナダ精神衛生全国会議で最も大きな役割を担い、カナダの精神衛生運動の中軸を担っていったのが、ヒンクスであった。

ヒンクスは、マクマーチィにクラークを紹介されて面会し、クラークの社会福祉診療所のメンバーとなった。ヒンクスはクラークを自身が影響を受けた人物としている。また、ヒンクスは、1909年にアメリカ合衆国に設立された精神衛生全国会議 National Committee for Mental Hygiene (NCMH)〔「カナダ精神衛生全国会議」との混乱を避けるため、以下では「アメリカ精神衛生全国会議」と記述〕の創設者クリフォード・W・ビアーズ Clifford Whittingham Beers の『わが魂にあうまで *A Mind that Found itself*[6]』を読み、アメリカ精神衛生全国会議のような組織がカナダに必要と考えたのであった[7]。ヒンクスは、1924年にはカナダ精神衛生全国会議の理事長 general director に、1930年から1938年にかけてはアメリカ精神衛生全国会議の理事長に就任した。ヒンクスは、知能テストに関心を示し、1913年から翌年にかけて、カナダで初めてビネー＝シモン知能検査を実施した[8]。なお、加米それぞれの精神衛生運動の牽引役を担ったヒンクスとビアーズが、ともに循環性人格 cyclothymic personality（循環気質 cyclothymia）で、青年期に精神障害を経験したことが指摘されている[9]。

4　*Our Own Master Race*, p. 110.

5　*Keeping America Sane*, pp. 167-169.

6　Clifford Whittingham Beers, *A Mind that Found Itself: An Autobiography*, New York, 1908〔クリフォード・W・ビーアズ（ママ）『わが魂にあうまで』（江畑敬介訳）星和書店、1980 年〕. 同書およびビアーズについては、「C・ビーアズ（ママ）とアメリカ精神衛生運動の歴史―訳者あとがきにかえて」などを参照。同書の初邦訳は『わが魂にあうまで』（加藤普佐次郎・前田則三訳）羽田書店、1949 年、である。

7　*Our Own Master Race*, p. 109.

8　*Keeping America Sane*, pp.169.

9　John D. Griffin, “The Amazing Careers of Hincks and Beers”, *Canadian Journal of Psychiatry*, vol.27, December 1982, pp. 668-671. ビアーズは『わが魂にあうまで』で自身の精神失調（「神経衰弱」）について述懐している。ビアーズと『わが魂にあうまで』については、ポーター『狂気』、pp. 139-

1917年、ヒンクスは、クラークにカナダ全域について精神異常者および精神薄弱者への新しい対処法を実施する必要を訴え、アメリカ合衆国の事例を学ぶため同国を訪れ、ビアーズにも面会した。そして、アメリカ精神衛生全国会議に匹敵する組織の設立をすべく、帰国の途についた。

1918年、ヒンクスはカナダ精神衛生全国会議の設立に奔走し、クラークらとともに設立にこぎつけたのだった[10]。カナダ精神衛生全国会議は、精神障害への対処の仕方が現状では不十分であること、精神障害者が多くのカナダ人が考える以上に深刻であり増加していること、そして、科学的方法で予防や対処を考える必要があること、という考えを共有していた。そして、実態調査を実施することを第一の任務とした。とくに学校や保護施設における精神薄弱の程度や状況を調べることであった。また、公衆精神衛生の専門家の養成や研究者育成が必要とされた。

後述するように、当時、「シェル・ショック shell shock（塹壕神経症）」を含む戦争神経症 war neurosis を患った人びとがもたらす弊害がクローズアップされており、カナダ精神衛生全国会議の設立に向け、多くの支援者を得た。賛助会員には、イートン夫人 Lady Eaton やカナダ総督デヴォンシャー公 Duke of Devonshire が、評議員には、カナダ太平洋鉄道総裁ショーネシー Lord Shaughnessy、同副総裁の E・W・ビーティ E. W. Beatty、モントリオール銀行総裁ヴィンセント・メレディス Sir Vincent Meredith、モルソン・ビール社長 F・W・モルソン F. W. Molson らが名を連ねた[11]。

かねてより移民を問題視していたクラークは、カナダ精神衛生全国会議の設立によって、移民の問題を直視させるべく、政府や世論に訴える機会を得たのであった。彼は、1918年にはトロント総合病院長を、1920年にはトロント大学医学部長をそれぞれ辞して、カナダ精神衛生全国会議の活動に専心した。

---

143. を参照。なお、ポーターの訳書では、アメリカ精神衛生全国会議は、「精神衛生国民委員会」と訳されている。同書、p. 143.

[10] 1918 年 2 月、設立準備のための会合がトロントでもたれ、同年 4 月にオタワで設立大会が開催された。設立大会にはビアーズが招かれている。なお、事務局はトロントのカレッジ・ストリートにおかれた。McConnachie, *op. cit.*, pp. 2, 33-35, 38.

[11] *Our Own Master Race*, p. 110.

カナダ精神衛生全国会議が設立されたころのカナダは、第1次大戦末期であった。当時、防空壕で被弾した際の心的外傷 psychic trauma である「シェル・ショック」や、その他砲火の下で恐怖を受けるなど、軍隊内で発生した様々な神経症にかかった戦争神経症[12] 患者5000人以上を含む、大量の復員軍人が帰還を始めていたからである。かかる状況下で、1919年、ブリティッシュ・コロンビア州政府は、カナダ精神衛生全国会議に対し、精神薄弱者の調査を依頼した[13]。

なお、「シェル・ショック」について、クラークやヒンクスらカナダ精神衛生全国会議側とアメリカ合衆国の精神衛生学者とでは、見解が異なっていた。後者は、心理学的不調は一時的 fugacious であり、遺伝とは別としたのに対して、クラークら、遺伝的な弱さによって、最も強靭な人びとが罹患しているとし、それは調査によって裏付けられているとした。また、若年層の移民の子供に、非行者、不品行、低能と診断される者の割合が高く、クラークらは、結局のところ、問題は移民にあるとの結論を下していた[14]。

さらに、大戦後には、「シェル・ショック」に加え、工業労働者、農民などの騒擾が頻発していた。大戦期には、徴兵制をめぐる分裂はあったものの、あまり表面化することなかった地域、民族、宗教、言語、階級の分裂が戦後になって顕在化したのである。1918年から翌年にかけて、ストライキなど労

---

[12] 戦争神経症とは、戦時中に軍隊内に発生した神経症の総称であり、防空壕で被弾した際の心的外傷 psychic trauma（トラウマ直後の急性ストレス障害、および、外傷後ストレス障害 (PTSD)post-traumatic stress disorder）であるいわゆるシェル・ショックなどを含んでいる。臨床像は、ヒステリー、神経衰弱、心因反応などである。加藤正明他監修・飯森眞喜雄他編『精神科ポケット辞典』新訂版、弘文堂、2006 年、pp.233, 283.「シェル・ショック」とは、第1次大戦のヨーロッパ戦線で使われるようになった言葉である。塹壕戦において爆弾による衝撃による心的外傷に対して用いられたが、爆弾が落ちてこない場所や砲撃を受けていない兵士にも同様の症状が出たため、専門家のあいだでは「シェル・ショック」という言葉を使用しなくなった。だが、「シェル・ショック」が本国帰還と同義とみなす兵士らによって、この用語がしばしば使用された。なお、南北戦争期には、「ノスタルジア」とよばれた。計見一雄『戦争する脳――破局への病理』平凡社新書、2007 年、pp.185-187. 第1次大戦期のカナダ兵の「シェル・ショック」、及びそれに対する精神医学の対応については、Thomas E. Brown, “Shell-Shock in the Canadian Expeditionary Force, 1914-1918: Canadian Psychiatry in the Great War”, in Charles G. Roland (ed.), *Health, Disease, and Medicine: Essays in Canadian History*, Toronto, 1984, pp. 308-332.

[13] *Our Own Master Race*, p. 93.

[14] *Keeping America Sane*, pp. 171.

働争議が頻発し、共産主義の脅威が懸念された。この「赤の脅威 red scare」からも移民問題に対するカナダ精神衛生全国会議の関心は強まった。クラークは、移民と社会的逸脱（社会不適応）social deviance との関連性を強調した。移民に問題ありとする点では同じだが、好ましからざる移民とは、生物学的に多産であったり、治療に費用を要したり、あるいは、犯罪を起こしかねないばかりか、政治的に危険とみなしたことが、従来のクラークの主張と異なっていた[15]。

さらにまた、医務検査官の役割の低さも懸念材料であった。医務検査官は、移民管理において助言的な役割しか与えられていなかった。彼らは、所定の書類を提出したものの、入国などの決定は移民官の手に一切委ねられていた。移民官はしばしば入国規定を軽視することがあり、いってみれば、入国の可否は、移民官のさじ加減しだいであったのである。医務検査官の不満は、他にもあった。出発港での医務監察がカナダ人の医師で行なわれる必要があったが、それが実現するのは、1928年になってからであった。医務検査官らが大戦前に指摘していたことが、戦後になって問題がより重要になっていたにも関わらず、問題が先送りされていたのである。クラークは、こうした医務検査の問題を喧伝することもカナダ精神衛生全国会議の役割と考えていた[16]。

移民政策改革を求めるクラークらの主張は、功を奏する結果となった。というのも、1919年 6 月の改革までは、労働組織に所属するという理由だけで送還措置をとるのは非合法であったが、ウィニペグ・ストライキの後、刑法および移民法が修正され、政府転覆を企てたり騒擾を煽ったりする可能性の高い移民の入国禁止ないしは送還が可能になったのである。また、15歳以上の移民に対して読み書きテストが導入されたり、軽度な精神薄弱者も、好ましからざる移民の範疇に加えられた[17]。1919年に実施された移民政策改革は、ウィニペグ・ストライキなどへの対応策であると同時に、同年の保健省創設に伴い、医務検査官が内務省から異動する措置の影響でもあった。しかし、

[15] *Keeping America Sane*, pp. 172-173.
[16] *Keeping America Sane*, p. 175.
[17] *Keeping America Sane*, p.174; Roberts, *op. cit.*, pp. 19-20.

ドゥビギンによれば、これらの点を認めつつも、移民政策改革がクラークの主張を包括しており、カナダ精神衛生全国会議が実施してきたロビー活動の成果が大きかったと評価している[18]。

先に述べたように、クラークは、ボルシェヴィズムを精神薄弱の問題と結びつけていた。彼は、政治的に危険と目される移民を医事的理由で入国拒否あるいは送還可能だとし、それによって、そうした移民の入国阻止ないしは送還が容易になるとした。彼はまた、カナダ精神衛生全国会議が戦後カナダ社会の国家再建、新たな国家的連帯において役割を担う可能性をも論じていた[19]。

1919年に改正された移民法では、イデオロギーや文化の観点が多分に加味されていた。政治的に危険な人物や、敵性外国人 enemy aliens の入国が禁止された[20]。また、1910年の移民法では、「カナダの気候や要件に不向きな人種」の入国禁止条項はあったが[21]、1919年には、より具体的かつ厳格になった。すなわち、英語またはフランス語、あるいはその他の言語または方言 dialect の識字テストの実施が盛りこまれたほか[22]、「カナダの気候、産業、社会、教育、労働等のカナダの諸要件に不向きな者」や「特異な慣習、習慣、生活様式、土地所有の形態のために好ましくない者」の入国禁止が明記された[23]。同法に基づいて出された枢密院令では、旧敵国臣民やドゥホボール Doukhobor 教徒らは排斥されたが、他のヨーロッパ移民を区別する措置は講じられなかった[24]。しかしながら、一般的にいって、イギリス諸島やアメリカ合衆国、北西ヨーロッパ諸国が好ましき移民の出身国とされた。とはいえ、こうした好ましき国からの移民がこぞって歓迎されたわけではない。既に述べたように、かねてからクラークは、イギリス系の質を問題視しており、バーナード・ホー

[18] *Keeping America Sane*, p. 174.
[19] *Keeping America Sane*, p.174.
[20] *Statutes of Canada, 1919*, c. 25, s. 3 (6) (*p*).
[21] *Statutes of Canada, 1910*, c. 27, s. 38 (*c*).
[22] *Statutes of Canada, 1919*, c. 25, s. 3 (6) (*t*).
[23] *Statutes of Canada, 1919*, c. 25, s. 13 (c) .
[24] *Report of the Department of Immigration and Colonization for the Fiscal Year Ended March 31, 1920*, p. 6. なお、ヨーロッパ諸国を「好ましき国々 preferred countries」と「好ましからざる国々 non-preferred countries」との区別に関しては、次の拙稿を参照。「大戦間期カナダにおける『白人』移民の選別――1922～23年移民・植民省小委員会史料が語るもの」『カナダ研究年報』26号、2006年9月。

ムズ Barnardo Homes や救世軍 Salvation Army によって連れて来られる子供たちなども懸念の対象であった。もっとも、近年の研究では、救世軍によってカナダに送られた女性や子供たちが、貧困なイギリス人の掃き溜めと化していたとする当時の批判に反して、実際には社会の順応し上昇していったとするケーススタディが示されている[25]。

さて、1919年の移民政策改革後も、クラークはさらなる問題を指摘していた。1922年、彼は、イギリス駐在の高等弁務官 High Commissioner に宛てた親書で、ユダヤ系移民など、中欧からのおびただしい数の移民は、好ましくないばかりか、危険であると述べていた。しかし、彼が糾弾したのは、こうした移民がイギリス系移民よりも劣等であるということではなく、移民法改正によっても、医務官 medical officers の決定が移民相によって退けられうるということにあった[26]。すなわち、医師による判断が政治的判断によって無視されることを懸念していたのである。

クラークは、1923年 5 月24日、ロンドンで開かれたイギリスおよびアイルランド医学心理学会 Medico-Psychological Association of Great Britain and Ireland の第 4 回モーズリィ講演 4th Maudsley Lecture で招待講演を行ない、同年 9 月には、トロントのカナダ・エンパイア・クラブ Empire Club of Canada

[25] Myra Rutherdale, “"Canada is no dumping ground": Public Discourse and Salvation Army Immigrant Women and Children, 1900-1930”, *Histoire sociale/ Social History*, vol. 40, no. 79, May 2007, pp. 115-142. イギリス系に精神障害者が多数含まれていたことは、「白人」の中の「白人」である主流「白人」社会の退化を意味し、それゆえに、その原因を移民に転嫁したとも考えられる。アメリカ合衆国史において、貴堂嘉之氏は、19 世紀中頃からアメリカ合衆国の精神薄弱施設に収容されていたのは白人の男女であり、白人の退化が社会問題としてより重要とされたとし、「白人旧系種の変質がすでに密かに進行していることを当局が知っていたからこそ、その災禍を外国からの侵入者に転嫁し排外主義が増幅された」側面を指摘する。識字テスト導入を主張したヘンリー・ロッジは、異質な移民による弊害を説いたが、英語国民の退化、市民の変質に対する恐怖の方が念頭にあったとされる。そして、貴堂氏は、世紀末アメリカ合衆国は、「内部からの変質」と「これまでとは異なる東欧・南欧出身の移民集団の大波が、内と外から「国民」の秩序境界を危機に陥れた時代であった」とする。貴堂嘉之「移民国家アメリカの『国民』管理の技法と『生―権力』――人種主義と優生学」古矢旬・山田史郎編著『権力と暴力（シリーズ・アメリカ研究の越境　２）』ミネルヴァ書房、2007 年、pp. 138-139. カナダの場合、非イギリス系に対する見方は、アメリカ合衆国と同様とみてよいであろう。ただし、イギリス系を問題視したことについては、イギリス本国への対抗という要素も考えねばならず、必ずしもアメリカ合衆国のケースが当てはまるわけではないと思われる。

[26] C. K. Clarke to P. C. Larkin, “Confidential Report on Immigration”, 2 March 1922, C. K. Clarke Archives, C. B. Farrar Library, Clarke Institute of Psychiatry, cited in Dowbiggin, *Keeping America Sane*, p. 176.

でも凱旋講演を行なった。いずれの席上でもクラークは、頑丈な sturdy ノルディック種 Nordic types を受け入れ、健全な移民がカナダからアメリカ合衆国へ流出を防ぐようなカナダの移民政策の必要性を訴え、移民政策を厳格に実施するために、政治家、輸送会社、財界の協力が必要だと力説した。また、環境とともに遺伝も人種の質を決定する要因であり、この点ではノルディック種が最も望ましいが、「人種の改良 improvement of race」のためには、少なくとも「無益な者useless」の排除が望ましいとし、精神障害者に対する断種措置にも言及した[27]。

同1923年10月12日、彼が1905年以来尽力してきたトロント精神病院 Toronto Psychiatric Hospital の定礎式が行われた。その後まもなくして発作を起こして床に伏し、翌年１月、66年の生涯を閉じた[28]。

クラークは、精神障害者の待遇や施設の改善にいち早く関心を示した人物であり、改革の時代にあってつねにその先駆的役割を演じてきた。それだけに、多くの抵抗に向き合わざるをえなかった。クラークにしてみれば、現場の医療に携わっていたがゆえに、移民増に伴って精神障害者が増加している状況を看過するわけにはいかなかった。クラークら精神科医が優生学的処置に期待を寄せたのは、驚くべきことではなかった。ドゥビギンが指摘するように、クラークが不幸だったのは、20世紀初頭のカナダでは、問題の緊急性を認識する人びとが少なかったことにあったといえよう[29]。

---

[27] Clarke, “The Fourth Maudsley Lecture”, *Public Health Journal*, vol. 14, no. 12, 1923, pp. 531-541 & vol. 15, no. 1, 1924, pp. 9-15; do., “Mental Abnormalities: A Factor in Industry”, *Empire Club of Canada, 1923*, Toronto, 1924, pp. 200-203; Hosokawa, “Keeping Canada Sane”, pp. 130-131; McConnache, *op. cit.*, pp. 123-124.

[28] *Keeping America Sane*, p. 177.

[29] *Keeping America Sane*, p. 178.

4　1920 年代から 1930 年代まで

4．1　断種への関心――――クラーク死去後の展開

クラークやマクマーチィら、精神薄弱の遺伝的要素を強調する人びとによって、世論を断種支持へと促す社会の土台が築かれていた。1920年代に入ると、カナダ社会の断種に対する関心は高まり、断種の立場をとる支持層が徐々にではあるが増加した。その背景には、移民政策において優生学的措置が遅々として進まないことへの苛立ちも働いていた。加えて、隣国アメリカ合衆国で断種法を可決する州が1923年から増加していったことや[30]、1927年のアメリカ合衆国最高裁でのバック対ベル *Buck v. Bell* 訴訟判決[31]によってヴァージニア州の断種法が支持されたことが、カナダの優生学支持者拡大に少なからぬ影響を及ぼした。

カナダ精神衛生全国会議はというと、メンバーがすべて断種法支持でまとまっていたわけではなかった。とはいえ、アメリカ合衆国の医学史にも明るいドゥビギンによれば、全体としてカナダ精神衛生全国会議は、アメリカ精神衛生全国会議よりも精神衛生措置としての断種導入には、積極的であったとする[32]。

1918年から1922年にかけて、ヒンクスらカナダ精神衛生全国会議は、アルバータ、ブリティッシュ・コロンビア両州を含む 7 つの州において、精神薄弱の状況調査を実施した。ちなみに、ほぼ同時期、アメリカ精神衛生全国会議は、深南部 Deep South にて同種の調査を行なっていた。第 1 次大戦後、移民の波が押し寄せたのは西部であり、カナダ精神衛生全国会議は西部の実態調査を重視していた[33]。

---

30 別表３「カナダとアメリカ合衆国の断種法」を参照。

31 バック対ベル訴訟の内容とその今日的意味については、秋葉聰・篠原睦治「『バック対ベル訴訟』とは何か――ケアリー・バックゆかりの地を訪ねて」日本社会臨床学会編『『新優生学』の時代の生老病死』（シリーズ「社会臨床の視界」３）現代書館、2008 年、真田孝昭「『キャリー・バックの断種手術』を読む」『社会臨床雑誌』（日本社会臨床学会）4 巻 1 号、1996 年 4 月。

32 *Keeping America Sane*, p.179.

33 McConnachie, *op. cit.* p. 54.

1919年に実施されたブリティッシュ・コロンビア州の調査では、ニューウェストミンスター精神病院の患者のみならず、孤児院、授産学校 industrial schools、公立学校、少年拘置所 detention homes も対象としていた。ロバート・メンジーズの言葉を借りれば、このカナダ精神衛生全国会議の調査によって、ブリティッシュ・コロンビア州での「精神衛生時代 mental hygiene era」が始まったのであった[34]。翌1920年に出された調査報告書は、同州における精神薄弱の割合が極めて高く、それが貧困、犯罪、売春の主要因であるがゆえに社会にとって危険であると述べ、精神薄弱者の再生産による脅威を指摘した。さらに、救護院収容者の72％が外国生まれであるとし、中国人や最下層のギリシア人を含む移民によって、不道徳な価値や行為が蔓延していると報告していた[35]。

アルバータ州でも、調査結果は同様であった。同州に関して、ヒンクスらカナダ精神衛生全国会議がとくに問題視したのは、当時増加していたスラヴ系移民の中に精神薄弱者の占める割合が高いことであった。ヒンクスは、かつてのクラーク同様、移民の量よりも質を問題にし、精神異常者、精神薄弱者は他の者以上に脅威となるため入国を拒否することが望ましいとした。そして、アルバータ州には、移民管理のような連邦管轄の問題を扱えぬゆえに、断種が「異常な人びとの増加を防ぐための」一方策であると示唆したのであった[36]。

アルバータ州では、かかる調査結果を同州のアルバータ農民女性連合 United Farm Women of Alberta、帝国婦女子団 Imperial Order Daughters of the Empire、女性キリスト教者禁酒同盟 Women’s Christian Temperance Union といった女性組織が直ちに取り上げ、同州がおかれた状況を憂慮したのである[37]。

---

[34] Robert Menzies, “ “Unfit” citizens and the B.C. Royal Commission on Mental Hygiene, 1925-28”, in Adamoski, Chunn & Menzies (eds.), *op. cit*, p. 391.

[35] Mimi Ajzenstadt, “Racializing Prohibitions: Alcohol Laws and Racial/Ethnic Minorities in British Columbia, 1871-1927”, in McLaren, Menzies & Chunn (eds.), *op. cit*., pp. 112-113; *Our Own Master Race*, p. 93; McConnachie, *op. cit*., pp. 54-55.

[36] “Mental Hygiene Survery of the Province of Alberta, 1921”, pp. 4, 42 cited in Timothy J. Christian, *op. cit.* pp. 2-7; *Our Own Master Race*, p. 99; *Keeping America Sane*, p.179.

[37] *Keeping America Sane*, p. 180.

とくにアルバータ農民女性連合は、断種法制定に向けての精力的なロビー活動を展開した。同州では1921年にアルバータ農民連合 United Farmers of Alberta が政権を掌握し、1926年に60議席中43議席を獲得すると、断種法制定の動きは加速化し、1928年、同州農業・保健相ジョージ・ホゥドリー George Hoadley の下で、断種法が可決したのであった[38]。

カナダ精神衛生全国会議は、アルバータ州での断種法案の行方に関心を示していた。同会議の『会報 *Bulletin of the Canadian National Committee for Mental Hygiene*』（1931年からは『精神衛生 *Mental Hygiene*』と改称）1927年７月号は、同年に５週間にわたって西部４州を視察したヒンクスの報告を掲載していたが、その中で、アルバータ州がカナダで最も先導役を果たしていると述べ、同州保健相が断種法案を提出の意向だと報じていた[39]。同年11月号では、アルバータ州の断種法の内容が具体的に紹介され[40]、翌年３月・５月合併号では、断種法の可決を報ずるとともに、可決に果たしたホゥドリーの尽力を讃えていた[41]。

また、ブリティッシュ・コロンビア州では、1925年に王立精神衛生委員会 Royal Commission on Mental Hygiene が設置され、1928年に最終報告書が出された。同報告書では、「適切で明らかに確実な精神障害のケースについて、慎重かつ安全な方策での随意の断種 permissive sexual sterilization 措置を実施するための法制化」を勧告した。しかし、実際の断種法案成立までには、数年の歳月を要した[42]。

ヒンクスらのカナダ精神衛生全国会議による調査結果は、アルバータ州

---

38 この過程については、次の拙稿を参照。「『白人国家』カナダの構築」、pp. 177-178、”Keeping Canada Sane”, p. 133.

39 *The Bulletin of the Canadian National Committee for Mental Hygiene*, vol. 2, no. 7, July 1927, p. 3.

40 *The Bulletin of the Canadian National Committee for Mental Hygiene*, vol. 2, no. 9, November 1927, p. 1.

41 *The Bulletin of the Canadian National Committee for Mental Hygiene*, vol. 3, no. 2 & 3, March & May 1928, p. 2.

42 王立精神衛生委員会については、Robert Menzies, “ “Unfit” Citizens and the B. C. Royal Commission on Mental Hygiene, 1925-28”, pp. 385-413. 断種法制定までの過程については、次の拙稿を参照。「『白人国家』カナダの構築」、pp. 178-180、”Keeping Canada Sane”, pp. 133-134. また、ブリティッシュ・コロンビア州の断種法に関する日本語新聞の扱いについては、拙稿「『大陸日報』（ブリティッシュ・コロンビア州、カナダ）の断種法報道をめぐる一考察――史料ノート」『鹿大史学』56号、2009年１月、を参照。

での断種法可決に影響を及ぼした。しかし、ドゥビギンは、1920年代を通して、ヒンクス自身の断種に対する姿勢が揺れていた点を指摘する。すなわち、ヒンクスの関心は、当初から、精神薄弱者をめぐる政府、とりわけオンタリオ州の対応の不適切さにあった。しかし、カナダ精神衛生全国会議は、精神薄弱者問題を選挙争点とすることができず、1925年、ヒンクスは、カナダ精神衛生全国会議の新たな方向性を模索するため、6か月にわたりヨーロッパを訪問した。その前後の時期の彼は、患者の精神薄弱が子供に遺伝するかどうかは医師が慎重に判断するという条件で断種措置を支持する一方、遺伝と精神薄弱の関係は十分解明されていないことを認識していた。彼は、ウォルター・フェルナルド Walter Fernald の研究を引き、精神薄弱と診断された者は、社会の脅威でも、怠惰でもないとし、かつまた、IQ テストに当初から関心を示しつつも、それのみで有能さを判断することはできないとした[43]。ドゥビギンのこの指摘から、医学的に証明できない限界を感じつつも、条件付きで断種措置を受け入れるというアンビヴァレントな姿勢をとっていたといえる。

ところが、ヨーロッパから帰国後のヒンクスの断種に対する見方は変化していた。1927 年、彼は、アルバータ州民に対して、断種法制定の必要性を訴え、以後も 1946 年頃まで[44]、つまり、加米とも断種法が制定される可能性が低くなっていた頃まで、断種法支持の姿勢を貫いたのであった。その理由として、再びドゥビギンによれば、ヒンクスは、断種は公衆衛生における効果的な措置だと考えており、過激な断種論者とは距離をおいていたとする。彼は、第 1 次大戦以前に説得力を有していた優生学・社会ダーウィニズムの理論によって正当化されている限りは、断種措置は受け入れられないだろうとみていたのであった。断種支持には過激な人びとがおり、そのため穏健な断

43 *Keeping America Sane*, p. 181.

44 C. M. Hincks, “Sterilize the Unfit”, *Maclean’s*, 15 February 1946, pp. 39-40, in *Keeping America Sane*, p. 182, n. 126. なお、精神衛生全国会議の後身であるカナダ精神衛生協会 Canadian Mental Health Association の公式な歴史である次の書には、ヒンクスは、1970 年代にアルバータ州が断種法を廃棄した時点でも、断種支持の姿勢を変えなかったとある。John D. Griffin, *In Search of Sanity: A Chronicle of the Canadian Mental Health Association, 1918-1988*, London, Ontario, 1989, p. 57. なお、先ののドゥビギンの書では、このカナダ精神衛生協会史を註であげるにとどまり、事実かどうか言及していない。

種支持者を反対に追いやってしまっている点をヒンクスは懸念していたのである[45]。

カナダ精神衛生全国会議が断種を支持したのは、患者を過密な収容施設から仮釈放ないしは退院させる問題の純粋な解決策としてであり、同会議は、過激な優生論を取り除き、より広範な人びとに断種を受け入れられるよう尽力した。同会議は大学での研究者を擁しており、彼らは環境要因から公衆衛生をみる傾向が強く、こうした人びとにも受容される必要があった。また、断種は、万能薬ではなかったにせよ、教育行政に携わる人びとにとっても理解されうるものであり、監察官や政府役人にとっても患者を安全に社会に解放する策であった。すなわち、断種は、慢性的に施設が過密化し資金不足に陥っている事態を打開する「脱施設化 deinstitutionalization」策として有効とみなされていたのである。実際、1927年、ヒンクスは「私自身断種を支持するが、それは優生学的見地からだけではなく、優境学（環境調整による優生学）euthenical 的見地からだ。精神障害者は健全な子供たちの発育を阻害・抑制することがあってはならぬのだ」[46]と述べていた。こうした姿勢はまた、不振に陥っていたカナダ精神衛生全国会議を復活させる方策でもあった。1930年、ヒンクスは、アメリカ精神衛生全国会議の理事長に就任し、加米双方の精神衛生運動を率先した。1933年にはブリティッシュ・コロンビア州で断種法が可決するが、ヒンクスらの活動は、カナダ社会において断種の支持層を広げることに一定の役割を果たし、同法可決への道をつけたといえよう[47]。

付記　本稿は、2007 ～ 2009 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)、2009 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(B)による研究成果の一部である。なお、本稿では、今日的観点からみて不適切な表現を使用しているが、当該期の歴史分析が主眼であることを了解されたい。

---

45 *Keeping America Sane*, p. 181.

46 Province of Alberta, Eugenics Board Correspondence File, cited in Christian, *op. cit.*, p. 7. See also *Keeping America Sane*, p.183.n.129.

47 *Keeping America Sane*, p. 183.

別表３　カナダとアメリカ合衆国の断種法（※はカナダ）

年	法制化された州	廃棄あるいは、違憲とされた州
1907	Indiana	
1908		
1909	Connecticut, California, Washington	
1910		
1911	Nevada, New Jersey, Iowa	
1912	New York	
1913	Oregon, North Dakota, Kansas, Michigan, Wisconsin	Iowa, Oregon, New Jersey
1914		
1915	Nebraska, Iowa	New York
1916		
1917	South Dakota, Oregon, New Hampshire	
1918		Michigan, Nevada
1919		
1920		Indiana
1921		
1922		
1923	Alabama, Michigan, Montana, Delaware	
1924	Virginia	
1925	Idaho, Minnesota, Maine, Utah	
1926		
1927		
1928	Mississippi, ※ Alberta	
1929	Arizona, Delaware, Idaho, Nebraska, North Carolina, West Virginia	
1930		
1931	Oklahoma, Vermont	
1932		
1933	※ British Columbia	

Ruth Clifford Engs, *The Eugenics Movement: An Encyclopedia,* Westport, Connecticut, 2005, p. 55.